



204号

2015 / 6 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’  
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli-san.com/>  
Eメール:[wanli@jcom.home.ne.jp](mailto:wanli@jcom.home.ne.jp)  
◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。



菜の花の海を背に花づくし 2015年2月28日 雲南省羅平・九龍瀑布群風景区にて 撮影：高橋節子

青い山を縫って広がる黄色い菜の花の海、流れ落ちる白い滝、手前にはピンクの桃の花が咲いていた。美しい景色に見とれていると、歌を口ずさみながら四人の娘さんがやって来た。花の冠に花の腕輪。何よりも娘さんたちが大輪の花のようだ。滝が後ろに隠れてしまったが。ま、いっか。(関連記事が16ページにあります)

‘わんりい’ 6月号の目次は最終ページにあります

今月の「詩人尹世霖の童詩の世界⑬」には、犬の詩が載っています。その詩は、お隣の少年に良くほえ、食べものを貰うと何処までも付いて来る、犬らしい犬のことをテーマにしています。私がお話したいのは、北京のお行儀の良い犬のお話です。生肉を貰えば、思わず食べてしまうかも知れませんが、もっと欲しいと付いて来るようなことはしない(と、私が勝手に想像している)犬のお話です。広い北京です。いろいろな犬がいると割り切ってお話を進めましょう。

北京の犬と言うと、直ぐペキニーズを考えます。清朝末まで、ペキニーズは原則、朝廷だけで飼われていたのですが、実際は、毛色が違ったり、サイズが規格外だったり、城の外で飼われていたものも多かったようです。アヘン戦争の時、イギリス軍が紫禁城に入り、皇帝の叔母の寝室で5匹のペキニーズを発見し、イギリスへ連れて帰り、中の1匹がヴィクトリア女王に献上されました。そして、この5匹から、ヨーロッパでペキニーズブームが起ったと云われます。

清朝が倒れ、中華民国を経て中華人民共和国が成立すると、愛玩用の犬は贅沢品として、根絶やしにされました。又、革命の直後は、生きるのに精一杯で、ペットを飼う等、考えられませんでした。しかし、人間は、気分的にゆとりが出てくると、何か可愛がるものが必要になるのでしょうか。20世紀の終わり頃には、北京市民の間で、小鳥を飼うのが流行りました。仕事を引退した人々が、自転車に鳥かごを4、5個も括りつけて、近くの公園で鳴き声を競ったり、これはと思う鳥の傍に籠をつるして、その歌声を覚えさせたりしていました。

そんな小鳥ブームが続く中で、犬を飼う人々が少しずつ増えて来ました。2001～2年頃はチラホラだった、犬を飼う人たちが、3年、4年と年を追うごとに増えていきました。一度中国からいなくなり、再び輸入した犬ですから、価格も高く、犬を登録するのに費用がかかりました。私の友人達の中には犬を飼う人がいないので、登録料がいくらなのか

聞きそびれましたが、友人の一人が3人目のお子さんを日本で出産して、戸籍の登録料が、犬よりも安かったと笑っていましたから、犬にはかなりの金額を払うのでしょう。

それでもステイタス・シンボルとして犬を飼う人たちがどんどん増えていきました。犬種は、ヨーロッパで復活したペキニーズが、80%を占めているようでした。北京の人々はやはりペキニーズがお気に入りようです。この犬種の性質でしょうか、北京で、犬の吼え声を聞いたことがありません。普段はおとなしいが、敵に対しては勇敢に立ち向かう、飼い主の言うことは良く聴くが、他人にはなかなか慣れない、など飼い主にとっては、堪らない魅力のようです。

日本ですと、朝夕の散歩の時間、リードに繋がれていても、前方から犬が来ると、吼えたり、近寄りたくて飼い主を引き摺るように進んだり、飼い主さんは大変な苦勞をしています。その点、北京ではリードを付けないで散歩している犬がほとんどでした。リードを付けるようにと指導されていますが、余り必要を感じていないようです。他人に吼えることはないし、前から来る犬に興味を示すこともありません、一度だけ、興味を示して近寄ろうとした犬に、飼い主が鋭い声をあげると、その犬は直ぐに止まりました。

ある時は、手入れの行き届いた犬が、独りで歩いているのに出くわし、迷子にでもなったかと心配しながら見ていると、何と、200メートルほど後ろから、リードを持ったその犬の飼い主が、悠々と歩いてくるのでした。リードをつけていないと、犬が車道に飛び出すのでは、と考えたりはしません。遠く離れて、それぞれに散歩していると、犬が用を足したのを見逃して、糞の始末が出来ていないことが時々あります。それが、この散歩の玉に瑕でしょうか。

最近、ステイタス・シンボルも大型化して、チャウチャウやボルゾイを連れた人も出て来て、流石にリードは必需品になっています。

Wú xìn bú lì  
无 信 不 立

信無くんば立たず 〈顔淵第十二〉

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

顔回、子路をはじめ『論語』には個性的な人物が数多く登場しますが、中でも異彩を放っているのは子貢です。子貢は雄弁家として知られていました。商才にたけていたとも言われています。雄弁家だけあって何度も孔子に議論を挑んでいます。『論語』に次のようなやり取りがあります。ある時、子貢が政治について孔子に質問しました。「子貢問政 (Zǐ gōng wèn zhèng)。」(子貢政を問う)〈顔淵第十二〉。孔子は即座に答えました。「足食、足兵、民信之矣 (Zú shí, zú bīng, mǐn xìn zhī yǐ)。」(食を足し、兵を足し、民をして之を信ぜしむ)。それは食糧と兵力を十分に蓄え、民から信頼を得ることだ、と。子貢はさらに質します。「必不得已而去、於斯三者何先? (Bì bù dé yǐ ér qù, yú sī sān zhě hé xiān?)」(必ず已むを得ずして去らば、斯の三者に於いて何れをか先にせん)。食糧、兵力、民の信頼、この三者のうち、やむを得ず一つを切り捨てるとすれば、どれを先にしますか、と。すると孔子は、「去兵 (Qù bīng)。」(兵を去らん)、と答えました。

孔子が活躍したのは春秋時代、天下大乱の時でした。各国の君主たちは競って富国強兵に励んでいました。兵力がなければ国は滅びるしかありません。かつて魯の国のトップリーダーを務めたことのある孔子は、そのことを十分すぎるほど知っていたはずですが。時代を考えれば、常識的にはあり得ない選択ですが、孔子は兵の切り捨てを選びました。この三者はいずれも一国の政治にとって不可欠のものです。削除の対象を敢えてこの中から選ぶとすれば、兵力を選ぶ以外にないと考え

たわけです。おそらく、兵力は他の二者を守るための手段の一つであって、この二者を捨ててまで保持すべきものではないということなのでしょう。ここに平和主義者としての孔子の真骨頂を見ることができます。

孔子を師と仰ぐ普通の弟子ならば、これで納得するはずですが、雄弁家を以て鳴る子貢は簡単には引き下がりません。「必ず已むを得ずして去らば、斯の二者に於いて何れをか先にせん」と、さらに孔子を追い詰めます。「斯の二者」とは言うまでもなく、「食」と「信」です。食糧と民の信頼、やむを得ず切り捨てるとすれば、この二つのうちのどちらにしますか、というわけです。並の先生なら、こんな意地悪な質問をされると答えに窮するでしょう。「バカな質問はよせ」と言って怒り出すかもしれません。ところが孔子は迷いません。その答えは「去食 (Qù shí)。」(食を去らん)でした。そしてさらに続けます。「自古皆有死、民无信不立 (Zì gǔ jiē yǒu sǐ, mǐn wú xìn bú lì)。」(古より皆死有り、民信無くんば立たず)。人はみな死ぬものと昔から決まっている。しかし政治に対する信頼がなければ、民はやっていけない。

人類は昔から飢饉や災害に悩まされてきました。今もそれは基本的には変わりません。政治の力で救える死もあれば、救えない死も確かにあります。しかし何れの場合でも政治にとって大事なものは、民の信頼を得ることです。これを後まわしにしての軍備の増強などは、もつての外ということでしょうか。

(わりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

日本には「八百万神」という言葉があり、森羅万象に神が宿るという考え方から生まれたと聞いています。中国の民間でも、具体的な数字では表せないものの、天宮から人間界、そして地獄にまで、数えきれない神仙の存在が信じられています。よく知られているものでは、「竈神」、「門神」、「土地神」、「城隍神(都市の守護神)」「河伯神(中国神話に登場する黄河の神)」「牡丹花神」「閻羅王(閻魔王のこと)」「玉皇大帝(中国道教における事実上の最高神)」「西王母(すべての女仙たちを統率する聖母)」などなどでしょうか。

今回は廁の神である「紫姑神」についての話です。

言い伝えでは、「紫姑神」は唐の時代の女性でした。生前は容姿端麗な心の優しい女性でしたが、ある官吏の妾になりました。しかし、夫の正室に妬まれ、虐められ、常に便所など汚い場所を掃除させられた挙句早逝しました。隣人たちは彼女を哀れと思い、その命日に彼女を偲んで自宅の廁に供え物をするようになりました。

このことを知った天帝もこの女性を哀れに思い「廁の神」として封じられたそうです。以来、中国各地で、紫姑の像を作り廟を建て、「紫姑神」を祀るようになりました。

さて、昔、<sup>ゆうちん</sup>尤琛という書生がいました。頭脳明晰な、しかも美貌の持ち主でした。ある時、遊びに出かけた折、たまたま荒れ果てた廟の傍を通りかかりました。中で少し休もうと思い、入って見ますと、「紫姑神」が祀られてました。その「紫姑神」の塑像が大変美しく、じっと見つめている内にうっとりとして愛慕の情が湧きあがってきました。しばらくして我に返り、廟を立ち去ろうとした時、頭に詩句が浮かんで来ましたので、すぐにそれを壁に書き残しました。

藐姑仙子落煙沙 玉作闌干氷作車。

若畏夜深風露冷 槿籬茅舍是郎家。  
藐姑山の仙女 霞む水辺に降りる、  
玉の手すりを氷の車に乗り換えて。  
深夜の風、露の冷たさを怖れるならば、  
君を待つのは、槿の垣根に茅の家

すると、その深夜、ほとほとと門を叩く音が聞こえてきました。戸を開けて見ますと、この世のものと思えないほど美しい女性がそこに立っていました。

「私は紫姑神です。もともと天界の仙女だったのですが、天の決まりに違反したので、人間界に落とされました。今日あなた様が私の塑像の前にお出でになられ、愛慕の情を持たれたご様子を見せ、そしてあなた様の詩を読んで感動し訪ねて参りました。もし私を妖怪とお疑いされなければ、寂しい夜を一緒に過ごしたいのですが」

尤は狂喜して女性の手を取って部屋に導き入れ、夫婦の契りを結びました。女性は毎晩必ずやってきますが、しかし、他の人間には女性の姿は見えませんでした。

ある日、紫姑は手に持っているものを尤に渡しました。

「これは紫絲囊<sup>ししろう</sup>というものです。ずっと前、私が天宮にいた時、天帝に謁見した際賜りました。織姫の手作りだそうです。これを身につけると、学力が大いに上ると言われています」と言いました。

紫姑の言った通り、尤が紫絲囊を身につけると、果たして学業の成績が日ごとに良くなってきました。そして県の試験にも合格して進士となり、四川省成都の知事にまで昇進しました。紫姑も共に尤の仕事を陰で助け、悪人を摘発したり、町を治める助言をしたりして、尤の成績は朝廷か

ら庶民まで、大変評価されました。

そんなある夜、紫姑はご馳走を食卓いっぱいに並べ、尤にお酒を勧めました。

「私はあなた様とお別れしなければならない時を迎えました。今夜は饞別の宴を用意してここを去ることになっています」

尤は吃驚して、その訳を訊ねました。紫姑は次のように述べました。

「私は天界で犯したことの罰で人間界に流罪になりましたが、流罪の期限が終わると天界に戻ることにしています。しかし、あなた様といっしょに暮らすようになりましたので、天界の役所に合わせる顔がありません。

しかも私は、もとを糺せば仙女の身分ですから寿命がありませんので冥界に行くこともできないのです。この身の行きどころがなくふらふらと人間界で漂い続けるのはとても耐えがたいことです。

又あなた様の愛情を受けてこのままこの家に身をおいても、所詮、本当の人間として姿を現すことができませんから、私はあなたのために子供を生むこともできません。そう考えると悲しくてなりません。最近になってこの私の悩みを泰山の神様に訴えました。泰山の神様は人間の生死を司る神様なのです。泰山の神様は私の窮状に同情下さり、私の名前を帳面に記入してくれました。

それで私は人間のように生まれ変わることができることになり15年後に本当の人間に生まれ変わることができます。その時に今のご縁を続けずっと夫婦として暮らせます。でも、あなた様は15年の間、結婚しないで私を待ってくれるかどうか分からないことです」

尤は涙を流しながら紫姑の話に耳を傾け、紫姑も又激しく泣きながら家を出ました。

紫姑神が尤の許を離れてから、尤の仕事は以前のように順調ではなくなり、とうとう過失を犯して職を下されました。その後縁談もあまた持ちかけられましたが固く断り、40歳になっても独身のまま15年の歳月が経ちました。

ある時、親友の学士が尤の妻の居ない生活を哀れんで「どうして結婚しないのか」と訊きました。

尤はその訳を詳しく語り聞かせるとその親友が吃驚して言いました。

「なんという不思議だ。ひょっとしたら、私のいとこの娘があなたを待っているのかもだ」

実はその親友のいとこのところに口がきけない娘がおり、もう嫁に行く年齢なのですが、人が縁談を持ちかけると、必ず筆で紙に「待尤郎(尤郎を待つ)」という文字を書くというのです。親友はすぐに尤を

連れていとこの家に行き娘に面会を求めると、娘は簾の後ろから紙をさし出しました。

「紫絲囊在否(紫絲囊はまだ持っている?)」  
というような内容が書いてありました。

尤は懐から紫絲囊を取り出して娘に見せると娘が強く頷きました。

その後、めでたい日を選び結婚の宴を催し、15年を経て二人は実の夫婦になりました。その晩、娘は突然天に向かって大きく笑い、声が出るようになりました。しかし、かつて尤と共に過ごした日々のことを娘が思い出すことはなく、二人は普通の夫婦として幸せに仲睦まじい生活を送りました。

(この項終り)



# 覆水盆に返らず

私の調べた諺・慣用句 40

三澤 統

“覆水盆に返らず”は大変馴染の深い慣用句だと思います。似たような慣用句に“後悔先に立たず”、“あとの祭り”などがありますが、いずれも一度起こってしまったことは、元には戻せないという意味を含んでいます。

物事を決断する時には良く考えて、“取り返しのつかないことをしてしまった”と後悔しないようにしたいものですね。

辞書にはそれぞれ次のように載っています。

▲ 小学館 日中辞典：

「覆水(ふくすい) 盆(ぼん) に返らず ①一度別れた夫婦の仲はもとにもどらな いことのたとえ。②一度したことは、もはや取り返しがつかないことのたとえ」

▲ 小学館 中日辞典：

「覆水难收(fù shuǐ nán shōu) 覆水盆に返らず ひとたびやってしまったことは取り返しがつかない；一度こじれた夫婦の仲はよりを戻すのが困難である」

この成語の由来は「拾遺記<sup>1)</sup>」の中の故事がもとになっています。



満柏 画

商朝の末年に、智謀優れた人物が居りました。後に齊の始祖となる姜太公<sup>きやうたいこう</sup>です。先祖は呂に封じられていたので、またの名を呂尚<sup>りよしょう</sup>と言われていました。

姜太公は商朝の官職に就いておりましたが、紂王<sup>2)</sup>の残忍な統治に嫌気がさしたため、商朝の官職を退いて、陝西省の渭水河<sup>いすい</sup>の近くの辺鄙な地方で隠居した生活を始めました。

彼は毎日のように川べりで釣りをしながら、周族の領袖の姫昌(周文王<sup>3)</sup>)のことにから召し出される機会をじっと待っていました。

姜太公はそうやって朝から晩まで釣りをしていましたので、妻の馬氏はこのまま姜太公と一緒に生活しても先の見込みがないと考え、離婚を願いました。

姜太公は「別れるなどと言わないで欲しい。いつかきっと裕福になれる」と一生懸命に馬氏を説得しました。しかし、馬氏は「このままでは裕福になどなれるはずがない」と姜太公の説得に耳を貸しませんでした。姜太公は彼女と別れざるを得ませんでした。

その後、姜太公は終に周文王の召集を受け、その智謀によって信任を得ると共に重用されて周文王の施政の補佐に当たりました。また、後に文王の子・周武王が商朝を攻め滅ぼして周朝を建立した際にも立派な功績を上げました。その後周東方(現在の山東省を中心にしたあたり)の齊に封じられ、春秋時代に富み栄えた齊国(B.C.1046年～B.C.386年)の始祖となりました。

別れた妻・馬氏は姜太公の生活が豊かになり、高い地位を得たのを知って、別れたことを後悔し、姜太公を訪ねて離婚を解消したいと願い出ました。

姜太公は、一壺の水を持って来させると、その水を地面にこぼし、馬氏に向かって「水を元どおり壺に戻しなさい」と命じました。馬氏はあわてて地面に腹ばいになって水を掬おうとしましたが、わずかな泥水が手に残っただけでした。

そこで、姜太公は彼女に向かい「そなたはすで

に私と別れたのだ。こぼした水を元に戻せないように、もう二度と一緒にすることは出来ないのだ」と冷やかに告げました。

〈注記〉

1) 拾遺記(しゅういき)：中国の伝説を集めた志怪(しかい)の書(怪異に関する話を記録した 短編小説類)。10巻。作

者は後秦時代(4世紀)の王嘉(おうか)。

2) 紂王(ちゅうおう)：殷の三十代皇帝で暴君の代表。後に周の武王に滅ぼされた。

3) 文王：紀元前1152年～紀元前1056年。寿命97歳。中国の周朝の始祖。姓は姫、諱は昌。父季歴と母太任の子、虢仲・虢叔の兄。周王朝の創始者である武王の父にあたる。

詩人尹世霖の童詩の世界 ⑬

金子總子・訳

yī tiáo gǒu  
一 条 狗

lín jū yǒu tiáo gǒu  
邻 居 有 条 狗，

jiàn rén wāng wāng hǒu  
见 人 汪 汪 吼；

réng qù yī kuài ròu gǔ tóu  
仍 去 一 块 肉 骨 头，

tā yáo tóu bǎi wěi gēn nǐ zǒu  
它 摇 头 摆 尾 跟 你 走。

āi yōu yōu  
哎 哟 哟，

dào dǐ shì tiáo gǒu  
到 底 是 条 狗。

lín jū yǒu tiáo gǒu  
邻 居 有 条 狗，

jiàn rén wāng wāng hǒu  
见 人 汪 汪 吼；

wān yāo jiǎn kuài xiǎo shí tóu  
弯 腰 捡 块 小 石 头，

tā jiā zhe wěi ba tuì zhe zǒu  
它 夹 着 尾 巴 退 着 走。

āi yōu yōu  
哎 哟 哟，

dào dǐ shì tiáo gǒu  
到 底 是 条 狗。



犬

お隣に 犬がいる  
人を見ると ワンワンと 吠える  
骨付き肉を 投げてやると  
頭を振り 尾を垂らして  
キミについてくるよ

ホーラネ  
やっぱり犬だよ



お隣に 犬がいる  
人を見ると ワンワンと吠える  
腰を曲げて 小さい石ころをひろうと  
あいつは 尻尾を挟んで  
後退りして逃げていく

ホーラネ  
やっぱり犬だよ



普陀山での一日目の終わりは、この島で一番大きい「普濟寺」観光である。例の黄色いマイクロバスに全員乗り込んだ。普濟寺は、1080年北宋時代(960年～1126年)に創建されたというから千年近い歴史を持っている。広大な寺領を黄色に塗られた塀が取り囲んでいる。

がっしりした山門から中に入ると、境内は広く、本堂の周囲には樹齢数百年と思われる樟樹(クスノキ)が幾本も建物全体を覆うように枝を広げている。円通宝殿と呼ばれる本堂が埋もれているようにさえ見える。本堂の正面の石段下には大きな香炉があり、存在感を示すべく濛々と線香の煙を吐き出している。中に入ると大きな仏像が鎮座している。観音菩薩である。中国各地の寺院で見られるカラフルな仏像と異なり、金色一色で荘厳な感じがする。この普濟寺は、後述する「法雨寺」、「慧濟寺」と共に「普陀三大寺」の筆頭に数えられる。

友人達はここでもあちこちで三拝九拝している。私はあきれて先に山門を出る。前面にかなり大きな蓮池が広がっている。池の周囲を巡ることが出来るように散歩道が続いている。池の半分は蓮の葉が重なり合うように水面を覆っている。さすがにもうすぐ10月なので花は咲いていないが、蓮の葉をじっと見ていると、以前にも「揚州市」のところで書いたことがある朱自清の「荷塘月色」の散文



陀山東南端の断崖

を思い出す。昼間なので月は出ていないが、夜の光景が脳裏に浮かんで来る。美しい蓮の花は、北京の公園や西湖をはじめ中国各地で見てきたが、牡丹の花はまだ一度もお目にかかったことがない。中国の国花は牡丹より静寂なイメージの蓮の花がいいのではという考えが頭をよぎった。

夕闇が迫ってきて、皆またマイクロバスに乗って出発した。5分もしない内にバスは停まってそこで解散となった。友人に我々のホテルを聞くとバスが停まったすぐ前にある建物だと言う。そこには正面玄関に、「普陀山銀雲山荘」と書かれた小奇麗で古風な感じの瓦屋根風の2階建ホテルがあった。

私は大きなビルの高級ホテルよりこのようなホテルが好きだ。小奇麗なものも気に入った。部屋は1階にあり少し休んで夕方7時ころにホテル内のレストランに集合となった。レストランには中庭があり、円形のテーブルがいくつか置かれていた。4人はそこに座ってビールで乾杯となった。空を見上げれば星が瞬き始めている。皆今日一日の長旅の平穩を喜び合った。このような時間も旅の一つの大きな楽しみである。明朝は朝6時にホテルの近くに集合となっているので早めに休むことにした。殆どの参加者は一泊して帰るらしく、朝早くから廻らなければ1日では見切れないためのようだ。

二日目の朝を迎えた。今日も晴れて気持ちがいい。朝5時半に起床し、顔を洗って集合場所に行っ



樟樹(クスノキ)に覆われた普濟寺





日本に行かなかった観音様が祀ってある不肯去観音院

た。すると居るのはガイドだけである。ガイドがいるのだから集合場所を間違えたわけではない。10分くらい経って一人二人と集まり始めた。我々を見ても急ぐ様子はない。遅れて申しわけないという気持ちは見てとれない。結局全員が集まったのは6時20分を廻ったところである。やはり中国人は一般的に時間にルーズのようだ。遅れて来ても「不好意思(すみません)」の一言もない。そうではない中国人も少なからずいるが、私は中国で何度もこのような場面に遭遇した。きちんとされている方には申し訳ないが、あえて書かせていただいた。

さて今日は、まず「不肯去観音院」にマイクロバスは向かった。不肯去観音院については前号で名前の由来だけを記したが、以下のことを付記したい。この寺院は複雑な断崖が続く岬の突端に鎮座している。境内の一角に、観音様を日本に運ぼうとした船が行く手を遮られ急遽避難した場所とのいわれがある「潮音洞」がある。切り立った狭い入り江に波が打ち付けている。船はここに避難して、観音様を下ろしたあと日本に向かって行ったということか。

不肯去観音院が名前の由来だけでなく、印象に残ったのは日本のいくつもの寺院との繋がりである。実はこの寺院は普陀山内で一番の歴史を持つのであるが、現在の仏殿は1980年に新たに建てられたものである。その時に日本の寺院が資金協力したそうである。観音院に向かって左側に回廊があり、そこに小さな観音様がズラリと置かれている。それぞれの像には寄進した寺院の名と

その時の住職の名と説明文が表示してある。その中の「千光寺」に私の目が止まった。尾道市の千光寺である。私は広島生まれなのでこの寺に何度か足を運んだ。普陀山まで来て故郷との繋がりがあろうとは思ってもよらなかった。説明文の最後に住職・多田某と書かれていた。帰国してから調べたがこのあたりの事情はよくわからない。二日目のスタートはうれしい気持ちで始まった。

次にガイドが案内したのは「南海観音」である。皆ガイドの後をゾロゾロついていく。海沿いの道は木々が繁っていて空気も新鮮である。そのうちに上の方に南海観音と書いてある牌楼が見えてきた。そこで入場券を買って中に入る。緩やかな坂道を登って行くと急に開けたところに出た。ここにも大きな牌楼がありその奥に巨大な観音像が屹立していた。金色に輝く立像は高さが33メートルもあるそうだ。例によってここでも観光客は、額に長い線香をかざして四方にお祈りをしていた。石段を登り、観音像のそばによると流石に大きく威圧感がある。観音霊場と呼ばれる普陀山の象徴である。この場所から海を一望でき、その光景は素晴らしい一言である。西方浄土に向かって立っているこの観音像は1997年の建立である。

観音様に手を合わせた後、もとの場所に戻りまたマイクロバスに乗り込んで「法雨寺」に向かった。普陀山で二番目に大きな寺院で明代の1580年の創建である。その後理由は分からないが清代の1699年に再建されている。それでも3百年以上前の建物だ。中に入ると大きな側壁があり、竜の素晴らしい彫刻が彫られている。さらに進むと3～4mの高さの尖塔のような法塔が二つ置かれていて、上部は穴があげられておりそこに向けて硬貨を投げ入れている人が群がっていた。うまく乗っかるとご利益があるのであろう。この寺院は後述する仏頂山の山麓にあるからか、斜面に沿って階段状にいくつもの立派な寺院が建てられている。中国を旅すると、どうして重機のない時代、山頂にかくも広大な寺院を作り上げたのか、と感心するところが多い。ここは低い山ではあるが日本では

あまり見られない光景である。中国人のエネルギーの底知れなさが感じられる。

山門を出ると友人が「我々を除く人たちは今日の午後バスで上海に帰るのでここから別行動になる」という。我々はもう一泊するのでゆったりできるのだ。まず腹ごしらえということで近くのレストランに入った。メニューに揚州チャーハンがあったので早速注文した。上海の揚州飯店で食べそびれたがようやく実現した。あの店のものとは違いかもしれないがとても美味しかった。

午後はすぐ近くに登山口がある「仏頂山」に登ることにした。普陀山の最高峰である仏頂山は高さが約290mしかないが、麓から頂上まで千段余りの石段が続いている。我々は森林浴をしながら一步一步石段を登った。すると前方に日本の袈裟のような服を着た数人が、3段石段を登ってはそこで跪き五体投地のようにして祈り、また3段登って同じように祈る動作を繰り返しながら登っている。またしばらくすると同じような人々を見た。普陀山はやはり信仰の地なのだ、という感じがする。そういえばこの島にはゴミがあまり見当たらない。すくなくとも信者はこの聖なる島を汚したくないのではないか。「三步一拜」を繰り返す信者を追い抜きながらようやく頂上に着いた。頂上の広場には「仏頂山」と刻まれた大きな石があり、そこでお互いに記念撮影。そこからすこし下ったところに普陀三大寺の残りのひとつ、「慧濟寺」がある。ガイドブックによれば、明代に園慧という僧がこの地に建てたとある。普陀山に来られた方はこの普陀三大寺はそれぞれ趣があり、必見である。

頂上にある土産物店をのぞいた後、下りは別のルートにした。途中、巨大な岩に「心」の文字を刻んだ「心字石」や「海天仏国」と彫られた岩を見なが

ら麓に下りた。そこに標識が立っていて矢印で「千歩沙」(沙は砂の意)の方向が表示してある。地図で見ると島の東側にある長い砂浜である。どのよう

な海辺か見に行くことにした。浜に来てみると、きめの細かな砂浜がゆるやかな曲線を描きながらかなり遠方まで続いている。しかもゴミひとつ落ちておらずとにかく美しい。海浴いに皆で歩いてみた。私はこの浜の沖合をその昔、遣唐使を乗せた船が何艘も決死の思いで通り過ぎたのではなかろうかと思った。遣唐使の主要航路の港である「寧波」はここから近いのである。(前号の地図を参照ください) 水平線の彼方は日本である。「揚州市」で書いた鑑真と阿



普陀山三大寺院のひとつ法雨寺

倍仲麻呂を思い浮かべた。

夕暮れ時が近くなった。友人に「どこかに郵便局があるか訊いて欲しい」と言うので、すぐ調べてくれた。普濟寺の近くにこの島唯一の郵便局があるので、またマイクロバスに乗って普濟寺に向かった。先ほどの山門の前を通り過ぎると郵便局が見えてきた。私はここで海外から時々絵葉書を送っていただくUさんとKさんに送ることにした。いくつかの種類があったが美しい磐陀石の絵葉書を選んだ。郵便局員から切手を購入し、手渡した。この絵葉書は私の家とUさんの家には約3週間かかって届いた。おそらくすぐ国慶節休暇が始まるので時間がかかったのかもしれない。しかしKさん宅には未だに着かない。どこをさまよっているのだろうか。

普陀山の旅は終わりに近づいた。郵便局から4人でゆったりと散策しながらホテルに向かった。小さな島なのでもうおおよその方角は分かっていた。夜の帳が下りてきた。明朝は5時起床だと言うので皆で夕食を摂ったあと、早めに床に就いた。

(続く)

2015年5月9～11日に開催された「第7回東アジア文化交渉学会 (<http://www.sciea.org/>)」の場で禹王を中心とした研究成果の発表が行われ、そこに参加してきました。(‘わんりい’ 2015年3月号/中国・城市めぐり(番外編)「治水の神・禹王について」参照ください)。

禹は中国古代の「夏」王朝の始祖で、治水の神と崇められている聖人です。中国はもとより日本、台湾、朝鮮半島の漢字文化圏に禹王像や記念碑が数多く建立されているのです。正に東アジアに関する学会の目的に適うテーマと言えましょう。

当学会は、「東アジアにおける文化交渉に関する研究を推進する」目的で設立されていますが、本年は禹王を中心テーマとして、また開催地を日本における禹王研究の中心地でもある神奈川県の開成町にして開かれました。開成町は今年が町制60周年の記念の年であり、ここで学会が開催されたのは意義深いことでした。

開会セレモニーで、府川裕一開成町長は、「この記念すべき年に国際学会を開催できることはこの上ない喜びです。東アジア文化交渉学会と開成町との共同作業は、新たな学会の在り方を提起する試みと考えています。町を挙げておもてなしをさせていただきます」と挨拶をされました。

町長が国際学会と紹介されたように、中国をはじめ香港、台湾、韓国、欧米からの研究者、それに日本国内から100人を超える研究者で総勢180名もの大規模な学会となりました。欧米まで禹王を研究されている方がいるのには驚きましたが、中国語も堪能であることに二度びっくりです。今回の学会を開くに当たっては、開成町にお住まいの初代「足柄の歴史再発見クラブ」の代表であり、「治水神・禹王研究会」会長の大脇良夫さんが3日間をマネジメントされました。また初日にはパワーポイントを使いながら基調講演をされましたが、禹王に対する熱意がひしひしと伝わって来る講演でした。

ここで3日間の学会のスケジュールを記します。  
〈1日目〉開会セレモニー/基調講演：近藤誠(前文

化庁長官)/基調講演：大脇良夫/分科会/東アジア文化交渉学会主催によるパーティ  
〈2日目〉分科会/全体会議/開成町主催による歓迎の夕べin瀬戸屋敷  
〈3日目〉禹王史跡見学ツアー



本学会は180名のうち、日本にお住まいの方を含め中国籍の方が多く、あちこちで中国語が聞かれました。初めて日本に来られた方も多く、したがっていろいろな場で通訳が必要でした。‘わんりい’会員の崔貞さんは、大脇さんの通訳を担当され、当意即妙の通訳は大変好評でした。ちなみに崔貞さんは大脇さんから「開成町人づくり憲章」の中国語訳を頼まれましたが、その出来栄への好さに大脇さんは、「崔さんは開成町と禹王の良き理解者です」と大変喜ばれていました。

ここで開成町と禹王の関係を紹介します。開成町は神奈川県の南西に位置する町です。神奈川県で一番面積の小さな町だそうです。春には桜に、6月にはアジサイに つつみ込まれる美しい町です。この町の周辺を酒匂川が流れ、相模湾に注いでいますがこの川はその昔は暴れ川で有名でした。川筋は何度も変わり農民の苦しみは大変なものでした。

特に1707年(宝永4年)の富士山大噴火では降灰のため河床が埋まり、大水が出るたびに堤防が決壊し、農民は甚大な被害を受けたのです。幕府の命を受けた田中丘隅という人物は改修工事の陣頭指揮に当たり、さしもの暴れ川もおだやかになったそうです。堤が完成後、その上に治水神・禹王の廟を祀ったのです。禹王の名前が「文命」であることからこの堤は文命堤と言われています。このあたりには記念の史跡が多く残されていますので一度ご覧になることをお勧めします。

最後に町名「開成」の出典をご説明します。中国古典で儒教の基本書「易経」のなかの「開物成務」から引用されていますが、意味は「人々の知識を開発し世の中の為になる務めを成そう」です。前述の「開成町人づくり憲章」に織り込まれているのです。

陶寺遺跡は山西省臨汾市讓汾県城から東北に7.5キロにある塔兒山の麓に位置しています。この遺跡は東西約2,000m、南北約1,500m、総面積は300万平方メートルあります。考古学者達の発掘により1,000か所あまりの墳墓及び陶窯、家屋などの遺跡が発見され、大量の玉、骨、石、陶器などの装身具や生産や生活の道具が出土されました。そして、放射性炭素年代測定法により4,500年前の文化遺跡と分かりました。

陶寺遺跡の考古発掘は大きな意義があり、中国の文明史は紀元前2,500年からだと証明することができました。これによって中華民族の五千年文明は考古学の面でも認められています。これは極めて重要なことです。中国五千年文明は今まで伝説と史実によって語られてきましたが、その発掘の成果で確実に歴史的事実が証明されたのです。

この陶寺遺跡で、世界最古の天文台遺跡が発見されています。

約4,000年前に造られたと見られています。

天文台は直径約40mの土で固めた半円形で、直径約60mの外円が取り囲んでいます。中心には高さ4mの計13本の石柱が立てられており、日の出の方角を観察しながら季節の移り変わりを理解するのに使ったと見られます。

中国社会科学院考古研究所が、この遺跡で1年半にわたって模擬天文観察をおこなったところ、中国で現在も広く使われている旧暦と1、2日の誤差しかなかったそうです。発見された天文台は観測以外にも祭祀にも使われました。

中華文明伝説上の三人の聖人、堯、舜、禹はここ山西省で活躍したと言われています。堯が多く、の部落の長となった時、機能的に住みやすい街作りをし、当時の中心地位を確立し、華夏文明の基礎を定めました。先秦時代の史籍の中に最も早く使われた「中国」という言葉は堯の建立した「古唐



陶寺天文台跡 (新華社)



陶寺古観象台遺址復元 (中国サイト・百度百科より)

幅の狭い観測用隙間の内側の観測点に人が立ち、柱と柱の狭い隙間から、高い山(独立峯)に上る太陽を観測する。冬至に太陽が昇るのは、南端の隙間から観測でき、夏至では、北の端の隙間から観測する。その他、それぞれの観測用の隙間は異なる季節に対応し、観測結果によって季節を確定すると共に暦策定のよりどころとなる。観測の対象が、「太陽の出る処(明るくなる処)」であるため、この地一帯を「晋」(上げる・進めるの意)と呼ぶようになった。

(中国サイト・百度百科抜粋)

国]を指しています。

堯は晩年、盟主の座を自分よりもっと才能のある舜に譲りました。

舜は帝位についてから、多くの民衆に徳を施し、それまでの部落連盟の会議を次第に国家機関にし、華夏文明を前進させました。

舜も晩年、より才能の有る禹に帝位を譲りました。禹は中原地方で部落連盟の最後の長になり、中国歴史上で国家政権の創始者になりました。つまり禹によって中国は文明発展の時期に入ったのです。禹は民衆を率いて大規模な治水を行い、民衆に安定した生活環境を作り、中国で最初の水

利専門家となりました。その功績は永久に中華民族の史籍にとどめられています。

多くの研究者は陶寺遺跡の発掘と出土された多くの文物が初めて考古学の面で堯、舜、禹の存在を証明出来ると思っています。陶寺遺跡は期間と地域があたかも堯・舜文明と相応していて、出土された文物と遺跡は堯・舜時代の生産と生活の記録です。

長い間、歴史研究の分野で堯、舜、禹は美しい

伝説に過ぎないと思われていました。陶寺文化の発見はこのような古い見方を変えるかもしれません。

国際交流員として2004年から2年間、青森県に來日した鄧仁有さん。その後帰国され、山西省太原市にある旅游学院の日本語ガイド養成コースで教鞭をとられています。前回に引き続き、鄧さんが執筆した日本語ガイド資格試験用テキストから、山西省の名所旧跡をご紹介します。

## 中国の笑い話 23 (「365夜笑話」より)

翻訳：有為楠君代

### 第65話：計算

「トム、この計算の宿題は、間違いがとても多いよ。お家で、お父さんに見てもらいながら、計算の練習をしなさい」

先生が、そう言いながら宿題帳を返すと、トムは得意そうに言った。

「先生！この宿題は、パパ独りでやったんだよ」

### 第66話：高速振り子時計

学 生「先生、高速振り子時計と、一般の振り子時計の違いは何ですか？」

胡先生「そんなことも分からないのか!? 名前から判断すれば、一目瞭然じゃないか。高速振り子時計は、一般の振り子時計より速く進むんだよ！」

### 第67話：パパの座右の銘

先生は、物の道理を分からせる為に、クラスの皆に言葉を覚えさせた。「他人が必要とするものを、十分に与えれば、他人からの要求は少なくなる」

すると、独りの男の子が、大きな声で言った。

「先生、それパパの座右の銘です」

先生が男の子に訊いた。

「ほう！君のお父さんのお仕事は何だね？」

男の子は答えて言った。

「ボクシング選手です！」

### 第68話：二か月目から始める

霍甲さんはかねてから、何か楽器を習いたいと考えていた。ある時ふと、琵琶が弾けるようになりたいと考えて、音楽の先生のところへ出かけていった。

霍甲「先生、個人教授で琵琶の補講をお願いすると、おいくらですか？」

先生「初めの月は3元です。2か月目からは毎月1元です」

霍甲「あ、先生、有難うございます。では、僕は2か月目から始めます」

### 第69話：先生より進んでる

先生「明々、もう試験は終わったのかね？」

明々「はい、終わりました。現在、僕は先生より何でもよく分かっています」

先生「どうしてだね？」

明々「だって、先生は未だ4年生担任でしょ。僕はもう5年生になりましたから」

### 第70話：石鹼

先生が学生に聞いた。

「自然界の四大元素は何か、言ってみなさい」

学生「火、空気、土壌、……」

先生「後は何だね？ 考えてご覧、手を洗う時必要なものだが……」

学生「分かった、石鹼だ！」

## 言葉事情—日本語の「あいまいさ」を考える

陽光新聞社・顧問  
塩澤宏宣

昨今はクールジャパンとい  
えば、日本の文化への「褒め言  
葉」として単純に喜んでいる  
ようです。そこでまず、ウィキ  
ペディアで調べてみました。  
以下はウィキペディアの抜粋  
です。

「2002年にアメリカのエコ  
ノミストであるダグラス・マッ  
グレイが雑誌『Foreign Policy』  
で「Japan's Gross National  
Cool」という記事を書き、その  
中で日本のアニメや流行音楽・  
電子ゲーム・家電製品・ファッ  
ション・グルメなどの流行文化  
分野における世界的な影響力  
を高く評価したことに端を発  
するとの記述がある」

外人がCoolと褒めてくれたからといって、日本人自らが「Cool! Cool!」と騒ぐことはないのでは…。加えて通産省には「クール・ジャパン室」をつくり、海外戦略の核にしようだなんて、どうかしているのではないのでしょうか。日本人は日本文化の人氣に驚き、外国人が自らの社会や文化に興味を持ってくれたと喜んでいます。そして「日本のどこに魅力があるのか」と確認し、自己を肯定しようとしているのです。

ブームの背景にあるのはそんな心理状態。自己を肯定したい気持ちは根本的なもので、個人にとっても、国にとっても普遍的に存在します。

### 「カタカナ日本語」の多さには辟易

明治維新後、先人たちは西洋の言葉を在来の日本語（漢字）に置き換えるために大変な苦勞をしたと思います。西洋語を漢字に翻訳し、更に中国に渡った言葉は約1000語あるといわれています。例を挙げれば、歴史・民族・国家・宗教・信用・自然・侵略・手続・取締・取消・目的・代表・退化・献金・国際

・基準・伝統・基地・学校・学生・警察・憲兵・検査官  
・写真・法治・哲学・出版・革命・思想・運動・企画・  
金融・交通・運命・広場・人民・意識・解放・信奉…  
等々。

明治維新後に近代化した日本に、中国から来た多くの留学生がこれらの日本語を持ち帰ってそのまま使用しました。中国では現在もこれらの言葉の80%ぐらいがそのまま使用されているといわれます。「中国製」で感心するのは「電脳」(コンピューター)ぐらいだと思いますが如何？

太平洋戦争中は「敵性語」として西洋語の使用を禁止していましたが、終戦後は「カタカナ日本語」がドッと移入されました。

ちなみに5月14日の読売新聞社説から西洋語(カタカナ日本語)を拾ってみました。「速いペースだ」、「サイバー分野でも…」、「ネットワーク破壊能力」、「日米防衛協力のガイドライン…」が並んでいました。最近ITの普及で、その筋の「カタカナ日本語」が氾濫してきたようです。私が現役時代、企画書などの書類では「カタカナ日本語」を使わないよう指導していました。

かつてNHKの番組で、カタカナ日本語を一番多く使用している業界は広告業界だ、と厳しく糾弾されていました。その業界OBとしては、「わが意を得たり」と思いました。広告業界では「マーケティング」と「コンセプト(思考の核心)」という「カタカナ日本語」をよく使います。これらは現在ではごく一般化した用語になっており、本当の意味をよく理解せず使用されているようです。

「マーケティング」とは、第二次世界大戦のヨーロッパ戦線で欧米連合軍が考案した作戦を、戦後「民間用」に転用したのが原点です。マーケティングの4つの要素「4P」を例に挙げて見ます。

Product = 製品 → 武器

Price = 価格 → 兵力・兵数

Place = 流通 → 兵站(兵、武器、食料などの運搬)

Promotion = プロモーション → 作戦。

これらを総合して戦う、市場競争も戦争と同じというわけです。

### 「日本語」が外国語になった

「思い出した」といえば1964年の東京五輪(オリンピック)で、柔道がJUDOとして世界中で使われていることを知りました。最近では海外での日本文化の流行(ブーム)のおかげでSAKEとかSUSHIをはじめ、多くの日本語が世界で通用しているようです。先の五輪誘致のときのOMOTENASHIは印象的でした。2020年に向けて観光客誘致が盛んです。どの論調も経済的効果ばかりです。日本文化、もっと言えば「日本文明」を理解してもらい、「和を以って尊しと為す」という日本の精神が理解されれば、世界から争いごとを排除するために一役買えるのではないのでしょうか。

### 「観光」を再考したい

「観光」は英語でsightseeing or tourです。漢和辞典で見ると「観」は、①全体をあわせて見渡す ②見渡した景色・ありさま ③見方・考え方…とあり、

「観光」は美しい景色や、その土地の名所などを見て回ること、と記されています。どうも私が望む日本文明にかかわる要素が感じられません。一般的な「観光」という既存の概念は「爆買い」に象徴される経済的効果に対する期待だと思えます。富士山観光を例に挙げれば、なぜ「霊峰富士」と言われるのか、日本人が古来より継承している「神と自然崇拜」の関係の一端を理解してもらおうようなシカケが必要だと思えます。

2013年の国連統計によれば、観光客集客の1位はフランスで約8500万人、観光収入は5兆7千億円、2位はアメリカで約7000万人、17兆5千億円です。ちなみに日本は27位で、1千万人。4位の中国5500万人、10位のタイ2650万人に及びません。2020年には2000万人を誘致したいと計画していますが、結果は如何に。それぞれお国柄が違いますから、見せたい所より「見たい所」を整

理して、来日したくなる魅力を引き出す必要があるのではないのでしょうか。

### 「ら抜き言葉」の氾濫

評判を呼んだ「国家の品格」の著者・藤原正彦氏がかねがね強調していることは「外国語を学ぶ前に、まず正しい日本語を学べ」ということです。彼の日本語についての核心です。

「日本は世界で唯一の情緒と形の文明である。国際化という名のアメリカ化に踊らされてきた日本人は、誇るべき国柄を忘れている。今日本に必要なことは理論より情緒、英語よりも日本語、民主主義より武士道精神である。それによって国家の品格を取り戻せ」というものです。

「ら抜き言葉」の氾濫については、「日本語」に関する書物のほとんどが取り上げて、日本文化の荒廃に対する危惧を指摘しています。言葉は長い歴史の中で変化するものだということは当然ですが、「来れる」とか「見れる」のような「ら抜き言葉」に代表される日本語の荒廃にはいささか危惧を覚えます。

そのほか若者たちの間で使われている、例えば「つらたん(つらい)」「ベッケンバウアー(別件あり)」「ズッ友(ずっと友達でいよう)」「カミッテル(マジでヤバイ)」「Bダッシュ(とにかく急げ)」等々の、「意味不明の言葉」を取り上げればなおさらです。

このような言語をもてあそぶようになった背景に、クールジャパンと外国人が賞賛する漫画や動画(アニメーション)の一部が、存在していることは、なんとも皮肉なことです。

#### 【'わりい'の原稿を募集しています】

'わりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又'わりい'の活動についてのご希望やご意見及び'わりい'に掲載の記事などについても、簡単にご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル 'わりい'

いちめんのなののはな いちめんのなののはな いちめんのなののはな いちめんのなののはな  
 いちめんのなののはな いちめんのなののはな いちめんのなののはな かすかなるむぎぶえ  
 いちめんのなののはな

詩:山村暮鳥「風景」より

山村暮鳥の詩を思い出した。暮鳥の詩は「いちめんのなののはな」のフレーズが8回続くが、羅平の菜の花を見ていると百万回唱えても終わらない。「ぜんめんのなののはな」なのだ。

2月27日夜8時過ぎ、羅平バスターミナルは真っ暗で人影も少なく、ホテルの予約さえしていない私たちは少し不安になった。バスを降りると客引きが何人も寄って来る。その中で、中国語が通じそうもない外国人と分かってからも、熱心に話しかけてきた若い運転手と交渉を始めた。翌日の観光に車をチャーターするための交渉である。話し合いの結果、交渉が成立。運転手は張さんという。張さんにホテル探しもお願いした。あちこち尋ね回って三か所目で、やっと宿をとることができた。

翌朝、すでに起床していたものの、6時前には張さんが部屋をノックして起こしに来た。なんと律義で誠実な人だろう。

日の出と菜の花の景観で有名な金鷄峰に向け、日の出時刻を目指して宿を出た。天気予報は快晴、しかも菜の花は前日に満開を迎えたという。ややひんやりとした早朝の街を抜けると辺り一面、菜の花畑が広がっていた。張さんが指さす方を見ると、小高い山の中腹に展望台が見えた。その展望台から日の出と菜の花を見るのだ。しばらく階段を上って展望台に着くと、すでに人の山、人の海。一段高いところにはカメラの三



脚が所狭しと立ち並び、大勢の中国人写真マニアが二コンやキャノンの高級カメラを覗きながら、陽が昇るのを待っている。下の方にはスマホやコンパクトカメラを手にした、これまた大勢の中国人観光客や私たちのような外国人観光客がいた。

7時半近く、太陽が向かいの山から姿を現し、ぐんぐん上って来た。見る見るうちに太陽は大きく赤く光り輝き、空を染めていく。薄ぼんやりしていた菜の花畑が、光を浴びてくっきりと黄色い姿を見せてきた。菜の花畑がただ広がっているだけではない。カルスト地形のため、大小の椀を伏せたような山が絶妙な配置で点在している。まるで菜の花の海に大小幾つもの島があるようだ。ここからの景色なら、どんな素人でも間違いなく名カメラマンになれるだろう。桃、梨、海藤も満開で菜の花の黄色と見事に調和している。

気温はぐんぐん上がり、長袖Tシャツ一枚では暑いくらいになった。展望台から下りて、菜の花畑に向かう。畑の中には観光用の道があり、散策しても、かわいく飾り立てられた牛車に乗って巡ってもよした。メイン道路の両側には土産物屋が並び、蜂蜜や菜の花の食用花粉などを売っている。あちこちに養蜂業者もいて、この時期は蜜を集める作業に大忙しだ。分離器にかけたできたての蜂蜜を容器に注いでいるのを見たら、思わず「買います」と声を上げてしまっていた。予定外の買い物だ。

次の目的地は九龍瀑布群風景区である。まったく中





国の滝というのは人の期待を裏切らない。十もの滝はそれぞれに趣が違い、どれも絵になる。ここは中国六大瀑布のひとつに選ばれている。圧巻は最後に姿を現す「白絮瀑」である。この滝に近づく遊歩道はない。上から見下ろすすばらしい景観は、私の筆力では到底表現できない。遠く向うから、いちめんのなのはなの海、どこまで行っても菜の花畑がなだらかに続いている。その間から、かなり落差がある堂々とした滝が流れ落ちているのだ。静謐な画面に滝だけが動いている。いつまでもこの景色を見ていたかった。

車に戻ると「明日のバスで元陽に行きたい。バスのチケットを買いにターミナルに行っておほしい」と張さんをお願いした。張さんは「先ずターミナルに行って、その後まだあまり観光客が訪れない菜の花の名所に行く。ターミナルにまた戻る契約はしてないから、60元上乗せしてほしい」と言い出した。何度も何度も聞き返し、やり取りを繰り返して、やっと張さんのこのような要望が聞き取れた。「わかった。それなら観光がすべて終わった後、自分たちでチケットを買いに行く。契約通りにやって」と答えると、張さんは私の聞き分けのなさ、60元をけちるしびとさに根負けしたのか「わかった。契約通りの料金300元でいい」と言った。そして「私は若いけれど、あなたたちは年寄りだ。あなたたちだけでチケットを買いになど行かせられない。これも何かの縁だ。もうあなたたちを親戚か友達のように思っているから」とじんわりさせる言葉を続け、ターミナルに直行してくれた。中国に行くと更に強気になる私に、辛抱強く終始にこやかに対応してくれた張さんだった。

売り切れ寸前のチケットを手に入れ、張さんおすすめの穴場に向かった。どこまで行っても平らな菜の花畑の一角に、何千人も入れるような野外劇場がある。毎年秋には有名歌手が来て野外コンサートが開かれるそうだ。花火もたくさん揚がり、それはそれは盛り上がるそうだ。ここの菜の花畑は、例えていえば、北海道の大平原が真っ黄色に染まったようだ。きれいに開いた一枚一枚の花びらを間近に見ながら、何度もカメラのシ

ャッターを押した。

いよいよ最後、日の入りと菜の花の景観で有名な牛街螺蛳田に到着した。ここの観光客と車の数は凄まじい。日の入りまで3時間以上もあるのに、菜の花畑が見渡せる車道際の展望台は人と車でごった返していた。景色を見下ろせる場所にはお約束のように三脚が並んでいる。展望台から見下ろすと名前の通り、菜の花畑が田螺のように渦を巻いていた。実は、畑ではなく棚田で、稲の刈り入れ後に菜の花の種をまくという。ちなみに今まで見てきた菜の花畑は、菜種を収穫後、トウモロコシや唐辛子を育てるそうだ。意図せず出来上がった渦巻状の棚田を菜の花が埋める、不思議な造形美に魅せられる。よくぞここに展望台を造ったものだ。道路はすでに渋滞。日の入りを待たずに帰路に着いた。

青空のもと、いちめんのなのはな、しかも満開の菜の花に遭遇できた。「元陽に着いたら必ず電話してください。心配だから」心熱い張さんの言葉が忘れられない。



白絮瀑の景観



'わんりい' 会の催しとしては珍しい、若いお母さんを対象とした、キャラ弁作り方講座の2回目でした。'わんりい' の活動をコープみらいの地域クラブとして登録している関係で、コープみらいのインフォメーションに企画を掲載して頂いたところ、遠くは足立区の方からの方を含めて都内から何人もの方が参加され、定員一杯の15名が集まりました。

参加の若いお母さんたちは、講座前にホワイトボードに掲示したイエさんの作品の写真に眼を見張り、講座では見本を作って見せてくださるイエさんの手許を真剣に見詰め、可愛いお弁当づくりへの意欲満々のように見受けられました。

12時過ぎにはお弁当完成で、各自が作ったそれぞれに可愛いお弁当を一緒に並べて写真撮影し、お土産にしました。お家で、お子さんたちの反応はどうだったでしょうか。

参加者の昼食は、別に用意してお弁当向きに冷めても美味しい中華風惣菜2種・ジャンジー 醬鶏と ジャンタン 醬蛋と ジョージャンチヤオジャン 家常炒扇貝(ホタテ貝の炒め物)、作り置きできるキャベツやニンジンのサラダ、中華風のトマトと卵のスープで、和気藹々の楽しい昼食をとりました。

お子さんが、幼稚園や学校に行っている間を利用して参加された方も多く、時間を気にしながらの解散になりましたが、それぞれに満足して帰途につかれたと思います。

さて、今回の講師のイエ・リンさんは料理の講師としては異色の、イラストレーターを本職とされる中国人女性です。中国魯迅美術大学卒業後来日、大手メーカーの広告宣伝部、企画部に務める傍ら絵本の挿絵や著名作家の表紙絵を描くなど、八面六臂の大活躍でし



イエ・リンさんの手許を熱心に見る受講者の皆さん



それぞれ個性的な参加者たちのキャラ弁が勢揃い

た。10年程前に双子の坊やの母親になられた時にしばし仕事を離れていましたが、坊や達が幼稚園に入園した折、イラストレーターとしての美的センスをフルに発揮して毎日愛情いっぱいのキャラ弁を二人に持たせて通園させ、それらのキャラ弁をサンリオ、バンダイなどのコンテストに出品したところ次々受賞、中国の育児雑誌で、‘お弁当&親子コミュニケーション’記事として連載され中国の若いお母さんたちの評判になりました。

3年前から再びイラストレーターの仕事を開き、引っ張りだこの忙しさの中で、昨年(2014年)秋、ご自分の弁当作りの体験を美しい挿絵と写真満載で「**好想为你做便当(あなたにお弁当を作りたい)**」というタイトルでまとめ北京で出版しました。この本は中国の生活部門関連書籍で瞬く間にベストセラーの売れ行きとのことです。今回2回目の「キャラ弁の会」は、イエ・リンさんのそのような活躍へのエールとしての開催でしたが、逆に日本のお弁当文化(キャラ弁を外しても)が、日常的な日本文化として海外で歓迎されている事実を教えて貰ったようでもあり、日本人として嬉しく思ったことでした。



お昼のおかずは醬鶏、醬蛋、ホタテの牡蠣油いため、サラダとスープ



デザートは丸ごとのスイカを切って遠方からの受講者をねぎらった

## 一挙に二種類、お弁当用にも作り置きもできる中華の便利なおかず

### 1 醬鶏(ジャンジー)(2人~3人分として)

**【材料】** 鶏もも肉(皮つき) 1枚、ネギ半本、生姜1片、醤油大匙2+α [料理酒大匙2、味醂大匙1、水100cc、八角、肉桂(シナモン)、クローブなど適量(なくともよい)]

#### 【作り方】

- 1) 鶏もも肉の皮側をフォークで数か所刺し、バットに並べて醤油少々を掛けてしばらく放置(時々裏返してまんべんなく醤油が行き渡る様にすれば尚可)。
- 2) ネギ3cm程度のぶつ切り。生姜、極細切り。八角や肉桂は散らばらないようにダシ取り用の小袋に入れて置く。
- 3) 上記のもも肉とぶつ切りネギを鉄板に載せて、200℃に予熱したオーブンに入れ、15分程度焼く。中まで火が通らなくとも鶏肉の皮にうっすら焦げ目がつけばよい。

※中まで火を通しておけば、下ごしらえとして、冷蔵庫や冷凍庫で保管して置くことができる。

4) 鍋に、水半カップと醤油大匙2、その他の調味料、生姜を加え、ひと煮立ちしたら、上記鶏肉を加え中火の弱火で15分くらい煮込む。冷めるまでそのまま放置すると味が染みる。

※冷めたら適宜切り分ける。

### 2 醬蛋(ジャンタン)

**【材料】** ゆで卵を人数分

#### 【作り方】

- 1) 卵を固めにゆでて皮を剥き、軽く包丁で傷を付けておく(味を沁みやすくするため)。
- 2) 醬鶏を取り出した煮汁に、ゆで卵を入れ、転がしながら10分程度中火の弱火で煮る。

※煮汁が足りなければ醬鶏を煮た煮汁と同等の濃度の煮汁を加える。

※醬鶏も醬蛋も4、5日は冷蔵庫で保存できる。前菜や、サラダやラーメンの具としても美味しいのでまとめて作っておくと便利。

## フィリピン滞在記 ⑥---Baguio(バギオ)の芸術活動を見て回る

為我井輝忠

フィリピンに来て6か月が過ぎた。この間、日本語を教えることはもちろんであるが、かなりの時間を旅行に費やしてきたのではないだろうか。金曜日、土曜日そして日曜日と3日間連続で休みが続くので、何度も近辺や周辺の観光地や友人のところに出かけたりした。それ以外にも祭日や長期休暇の時を利用して出かけることも多い。

そうした中で一番多く出かけたところはバギオである。もうすでに4回行った。バギオは私が住むサン・フェルナンドからバスで2時間ほどのところにあり、マニラに出かけるのに7時間以上かかるのを考えると、はるかに行きやすい。バギオに出かける理由はいろいろあるが、ここは日本の軽井沢のような高原都市で涼しいという点や芸術的な雰囲気があり、ギャラリーや美術館が数多くあって、フィリピンの芸術活動を知ることが出来るという点もある。更にバギオに来ると、いつも清浄な空気と都市の喧騒から逃れてほっと出来る空間がある。

今回、知人から「iNima 2」という版画展があるので行かないかと誘いを受け、インターネットで詳しい情報を見ると、ルソン島北部(私がいるところであるが)のコレディア地方に住む狩猟民族を描いた作品の展示をしているとのことであった。アーティストはLeonard Aguinaldo(レオナルド・アグイナルド)という人で、まだ40代の若い芸術家である。実は、私自身フィリピンの芸術に関しては全く知らない状態で、最近マニラの美術館で近現代の様々な作品を見たばかりで、まだフィリピン全体の状況すらつかんでいない。

映画に関しては、これまで日本にいた時にアジア映画祭で何本か見たことがあり、芸術的に優れた作品を見たことを覚えている。何人かの監督や俳優にお目に掛かったこともある。それなりのイメージを持っている。



展示会の会場となったMaryknoll Ecological Sanctuary (メアリーノル・エコロジカル・サンクチュアリー)

しかし、絵画や版画に関しては全く未知の分野で、強い興味を感じるとともに期待外れになるかもしれないというような不安もあった。いざ会場に足をはこんでみると、そんな危惧はすぐ消えてしまった。会場に展示されていた作品は30点ほどであった。どれも北ルソンのコレディア地方のユネスコの世界遺産に登録されている棚田(ライス・テラス)のある地方に住む狩猟民族のイフガオ族の人々の生活や習慣、文化を描いたもので、白と黒を基調とした作品ばかりである。いくつかの作品を紹介しているので、ご覧下さい。作品はイフガオ族の人々、彼らの日常生活、祭り、風景、音楽、狩猟等描いている。こうした作品を見ると、彼らの住んでいる地域を訪ねてみたくなった。

作品を見ると、竹で作られた彼らの民



Binuron(イフガオ族の住居)



Adangyam(イフガオ族の金持夫婦)



Bumbaki(種族の歴史を語る語り部)



Gangya(ドラムをたたく男)

族楽器から微かに彼らの歌や踊りが聞こえてくるような気がした。会場の静かな雰囲気と共に作品の持つ静穏な様を見ていると、時間を忘れるほどである。どのくらい見ていただろうか。1時間以上は見えていたものと思う。この日はアーティストにはお会いできなかったが、いずれお会いし、お話を聞きたいものと思う。

長い時間の後ふと我に返り、外に出て、会場のあ

るMaryknoll Ecological Sanctuary(メアリーノール・エコロジカル・サンクチュアリー)を散策してみた。広大な敷地に環境教育のための自然を生かした庭園や施設があり、こちらも十分自然を楽しむことが出来るようになっている。宿泊施設もあるようなので、1日滞在し、ゆっくりするのもよさそうである。この日は素晴らしい作品をいくつも鑑賞することが出来て大いに満足し、帰路に着いた。

### ぼくが見て感じたスリランカ紹介88

## スリランカ・カレーよもやま話—その5

赤岡健一郎 (日本スリランカ武道協会  
日本スリランカ文化交流協会)

まずは、スリランカ・カレーよもやま話の1回目に次回説明すると書いたのに、ずっと気になりながらも書けなかった、お米の種類や炊き方、パパダンやポルサンボール等のサイドメニューについて説明します。

お米に関しては気になりながらも書けなかったのには訳があって、本当に基本的な違いで、もしかするとかなり以前にあった日本での米不足の時にタイ国から緊急輸入された米の匂いが不評だった原因につながるかもしれません。ここいらが良く理解出来ていなかった為に延ばし延ばしになってしまいました。勉強しましたので漸く書けるようになりました。

この違いを含めてお米の種類から説明しましょう。日本では標準米や秋田〇〇〇等の様に産地の名称が付いたお米が流通しています。ご存知の様に、色々な名称が付いています。最近では雑穀米や米の原種に近い物も出回っていますが、基本的にはジャポニカ米である事には違いがありません。

アジア各国でジャポニカ米を栽培しているのは少数派で、ほとんど国ではインディカ米が栽培されています。もちろんスリランカでもインディカ米が栽培されています。お米の形は丸いのや長いのや色々なとあり、色も白いのから赤色や黒っぽい物まで色々あります。主として少し赤みがかったお米(レッドライス)が食べられています。

レッドライスにも丸みを帯びた小粒種と長粒種があり小粒種の方が好まれています。ちなみにスリランカに駐在している日本人は、アメリカやオーストラリアで栽培され輸入されているジャポニカ米を食べている人が多いです。何でも、日本産のコメは日本の法律で簡単には輸出できないそうで、わざわざ他所の国で作っているジャポニカ米を、スリランカ米の5～6倍のお金を払って購入しています。日本では米余りなんて言われているのに、海外で生活している日本人は他国産の高価な米を買っている、何とかならないものですかね。

さて、お米の匂いの原因ですが、ジャポニカ米とインディカ米の違いではありませんでした。スリランカだけでなく、多分インディカ米を栽培しているアジア各国でも同じだと思われます。お米の形や色とは関係なく、パーボイルド(par-boiled)と言って米を取穫後に粉を付けたままで半茹でにします。多分、暑い国なので保存との関係もあるのだと思われます。

この粉を付けたままで茹でてしまう事によって、多少粉の匂いが付くようですが、現地の人達は全く気にしません。気にしないと言うより、当然と思っているのかもしれませんがね。日本では粉を付けたままで茹でるなんて、思いもつかない方法です。これがタイ国から緊急輸入された米の匂いの原因だったのかもしれませんが。

パーボイルドされた米の他にキャクルハールと言う、茹でないので生のまま脱穀したお米も売られています。こちらは炊いた後でも匂わず、スリランカに嫁いだ日本人の方にも好評の様です。パーボイルドされたお米はタンバプハールと呼ばれ、こちらの方がキャクルハールよりも若干高価ですが、スリランカの人達には人気があります。特にカレーには絶対にタンバプハールの方が合う様です。

お米の炊き方とも関係しますが、一旦茹でる事によって炊き上がりがサラサラになり、カレーとの混ざり具合が良いからです。更に一旦茹でる事によってお米に含まれる糖質が減り、健康にも良いとされ、特に糖尿病に効くと言われています。余談ですが糖尿病はスリランカの国民病で、自らビッグイー

ター(big eater)と呼ぶほどスリランカの人々は大量の米を食べます。紅茶に入れる大量の砂糖や練乳、超甘いケーキ等色々原因は有るので、お米ぐらいはタンバプハールを食べた方が良いでしょう。

次にお米の炊き方です。スリランカではアジア各国と同様に湯取り法と呼ばれる炊き方をします。調理方は至って簡単、蕎麦や饅頭、パスタを茹でると同じ様に、鍋に大量のお湯を沸かし米を投入して茹でるだけです。

お米の芯が少し残り歯ごたえがある、いわゆるアルデンテで火を止めます。この状態でザル等にお米をあけ、良く湯切りをした後に鍋に戻して蓋をして芯が無くなるまで蒸らします。この方法は教科書的な上品な方法で、何時も忙しい主婦は、火傷をしないように気を付けながら、アルデンテの状態で蓋をし、鍋をひっくり返して湯切りをして、そのまんま鍋を放置しておきます。どうしてもザルに残ってしまうお米や時間を節約したい主婦の知恵なのでしょう。主婦の勘で蒸し上がる時間が判るみたいです。

湯取り法の利点は、大量のお湯でお米を茹で、茹で水を捨ててしまう事によって、お米に含まれるデンプン質やパーボイルドで減らされた糖質を更に減じられる事です。但し、日本人好みのお米のヌメリは無くなりサラサラのご飯が出来上がります。

今回でカレーの話は終わらせる予定でしたが、サイドメニュー等の話に至らないうちに予定枚数になってしまいました。

スリランカの料理にテンブラードゥワと言うのが有ります。これはポルトガルから伝わった料理で、日本の天麩羅と同じ語源になります。こんな話をお伝えしたいので、申し訳ありませんがもう1回だけおつきあい願います。

#### 使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついでに田井にお渡し下さい。

◆わんりいの催し **中国語で読む・漢詩の会**

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

6月 7日(日) まちだ中央公民館、第3・第4学習室  
7月19日(日) まちだ中央公民館第7学習室

▲時間：10:00～11:30

▲講師：植田渥雄先生  
(現桜美林大学孔子学院講師)

▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：20名(原則として)

\*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)  
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)



◆わんりいの催し **ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう！**

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体力を抜いて、気持ちよく発声しよう！！

▲6月の講座：6月23日(火) } 町田市民フォーラム  
▲7月の講座：7月28日(火) } 視聴覚室

▲時間 10:00～11:30

★動きやすい服装でご参加ください

▲6月の練習歌「心の瞳」

▲講師：Emmé(歌手)

▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：15名(原則として)

◆申込み：☎042-735-7187(鈴木)  
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)



【(公財) 日中友好会館・文化事業部の催し】

現代漫画の代表的作品の原画 約60点を展示

**中国漫画展** 日中友好会館美術館で開催中です

<http://www.jcfc.or.jp/blog/archives/6236>

- 会場：日中友好会館美術館(東京都文京区後楽1-5-3)
- 会期：2015年5月28日(木)～6月28日(日) 休館、毎週月曜日
- 開館時間：10:00～17:00

【関連イベント】(詳細は5月号を参照して下さい)

- ◆絵手紙体験講座：6月9日(火)14:00～16:00
- ◆記念講演会/茶話会「漫画から読む中国現代ニュース」

☎03-3815-5085 FAX03-3811-5263 e-mail:bunka@jcfc.or.jp

面白いと面白い



「位置が間違っている」曲土龍 2014年

入場無料

**岡上中国語研究会新会員募集**

- 毎週土曜日10:00～12:00
- 麻生市民館岡上分館(〒215-0027麻生区岡上286-1)
- 講師：劉冠群先生(北京出身)
- 会費：月謝4,000円

◆問合せ：☎044-988-2031(本間)  
E-mail: tizm2008@jcom.home.ne.jp(和泉)

**町田中国語講座**(毎月第1、第2、第4土曜日)

- 会場：JR町田駅周辺の市の施設
- 講師：郁唯先生(天津師範大学卒業)
- ※見学ご希望の方は事前に下記へご連絡ください。

●午前クラス 10:15～12:15 初心者大歓迎

▲会費：月謝/3か月 10,000円

▲問合せ：☎042-725-3963(森川)

E-mail: ymorikawan@ybb.ne.jp

●午後クラス 14:00～16:00

▲会費：月謝/4,000円/月

▲対象：ピンインの分かる方

▲問合せ：☎090-1425-0472(寺西)

E-mail: t\_taizan@yahoo.co.jp

‘わんりい’は、いつでも新入会を歓迎しています。  
新年度(4月)入会年会費：1500円 入会金なし  
郵便局振替口座：00180-5-134011 ‘わんりい’  
途中入会申し込みの方は、入会時期によって割引  
引かれますので、下記へお問い合わせください。

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。入会されると、

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100(事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

町田国際交流センター・協力部会の催し ～ 映像とお話し ～

参加無料

雲南省、貴州省など西南中国の少数民族たちは、何故、かくも精緻な素晴らしい衣装を纏うのか

▲ 2015年6月25日 14:00～15:30 ▲ 場所: 町田市民フォーラム・視聴覚室 ▲ 講師: 坂井昌二氏

中国には、55少数民族が住んでおりその大半は雲南省、貴州省、四川省など中国西南部に住む。彼らが生み出す精緻な布を手にとるとき、美しいものを創り出し、また美しいものを求めてやまない 'ひと' であることの素晴らしさと、私たちが現代文明の中で忘れかけている大切なものを思い起こす。(実物の展示有り)



【予定のお話】

1. 雲南省や貴州省など中国西南部の少数民族について
2. 衣装の模様や形に込められた民族の歴史

\* 申込方法: 「6月25日講演会申し込み」と書いて、住所・氏名・参加人数・☎番号を記入し、町田国際交流センター (Fax 番号: 042-722-5330) へFaxする。

参加無料

麻生市民館利用団体による あさおサークル祭2015

● 2015年7月18日(土)・19日(日) ● 場所: 川崎市麻生市民館 (小田急線新百合ヶ丘北口3分)

【'わんりい'参加のプログラム】

▲ 7月18日(土) 視聴覚室 10:30～12:00

映像で見る、麗しのチベット

冒険家・烏里烏沙さん撮影の美しく雄大なチベットとそこに生きる人々のありのままの姿を映像で見る。解説有り。

▲ 7月18日(土) 大会議室 14:30～15:30

山下孝之らによるケーナ (アンデスの民族楽器) 演奏会

どこか懐かしく、どこか心なごむケーナの音色を生かした日本的味わいのある山下孝之創作曲など多数!

◆ ほかの団体の催しは、'わんりい' 7月号に同封のプログラムをご覧ください。

町田中央図書館で、佐藤紀子(張怡申)絵本原画展が始まります

● 町田中央図書館 (エスカレーター協展示コーナー) ● 2015年6月9日(火)～6月21日(日)

右記、開館時間中は鑑賞可です。◆火・水・金 10:00～20:00 ◆木・土・日・祝 10:00～17:00

初心者のための水墨画教室

【鶴川水墨画教室】体験のお誘い

生徒のレベルと個性に応じた適切な指導を体験してみませんか。気楽にご参加ください。

● 講師: 満柏 (◎日中水墨協会会長)

● 場所: 鶴川市民センター (駐車場有)

〒195-0062 東京都町田市大蔵町1981-4

● 曜日・時間: 毎月第2、第4(月) 14:00～16:00

● 体験参加費: 1000円  
見学: 無料

● 問合せ: 野島

☎ 042-735-6135



【2015年6月定例会と7月号のおたより発送準備】

両方とも、三輪センター・第3会議室です。

◆ 6月定例会: 6月11日(木) 13:30～

◆ 7月号おたより発送準備: 6月28日(日) 10:30～

※ おたより発送準備の日はお弁当を持参ください。

'わんりい' 204号の主な目次

北京雑感(95)北京の犬	2
論語断片⑦ 无信不立 (信無くんば立たず)	3
媛媛讲故事 (74)「紫姑神物語」	4
諺・慣用句 (40)「覆水盆に返らず」	6
詩人尹世霖の童詩の世界⑬	7
中国・城市めぐり (42) 上海と普陀山③	8
治水の神・禹王に関する学会に参加して	11
鄧さんの観光ガイド「中国五千年文明史の重要な証拠」	12
中国の笑話 (23) [365夜笑話より]	13
言葉事情……日本語の「あいまいさ」を考える	14
いちめんのなのはな ～雲南省羅平～	16
'わんりい' 活動報告・キャラ弁の会	18
フィリピン滞在記⑥バギオの芸術活動をみる	20
スリランカ紹介(88)カレーよもやま話⑤	21
'わんりい' 掲示板	23・24